

# 韓国における日本研究の現状と展望

金 春美

高麗大学校日本学研究所所長・同大日文科教授

## 1. はじめに

本日はこのような盛大なシンポジウムにお招き下さり、大変光栄に存しております。また河合隼雄所長以下、日文研のスタッフの皆さんが、海外における日本研究、なかでも韓国におけるそれに注目され、今回、このようなシンポジウムを企画なされたことに対して、心からの賛辞と感謝を、まずこの場を借りて申し上げたいと思います。

今回、私に任された主題は、韓国における日本研究の現状と展望を述べるというものですが、そのような重責を果たす能力が現在の私にあるかどうか、非常に心もとないというのが、率直な気持ちです。一口に「韓国における日本研究」と申しましても、これまでに様々な分野の様々な研究者が、夥しい数の研究業績を残しておりまして、そのすべてを把握してご報告差し上げ、また展望まで述べるというのは、正直言って現在の私の能力を越える作業です。にもかかわらず、今回の講演をあえて引き受けたのは、私が現在、高麗大学校の日本学研究所の所長という、これまた重要なポストを引き受けながら感じてきた点や難しさなどを、率直に皆さんにお話することで、韓国の日本学研究がどうあるべきか、またそのことと国際日本文化研究センターとはいかなる関係にあるべきなのかを私なりの立場で考え、私たち韓国人研究者と日文研との望ましいネットワーク形成に一助したいと思ったからです。

私が現在、所長を引き受けております高麗大日本学研究所が設立されたのは、1999年8月のことでして、かなり最近のことに属しま

す。それまでも韓国のいくつかの大学では、日本学研究を専門に行なう研究所が良質の研究成果を世に問い、韓国と日本との間に横たわる様々な問題や懸案に実践的に対処してきました。比較的、最近のことで申し上げれば、日本の東京女子大をお辞めになって韓国に帰国された池明観先生が、翰林大の日本学研究所の所長として多方面にわたる活躍をなさっており、最近では韓国政府の仕事として、韓国内における日本の大衆文化の開放問題や、韓国と日本の歴史教科書の共同執筆などの作業に取り組んでおられることは、ここでぜひご報告差し上げなければならない業績でしょう。私の所属しております高麗大にも、1957年という非常に早い時期から亜細亜問題研究所という研究所が、特に日本政治や日韓関係の分野におきまして日本研究のメッカとも言うべき役割を担って参りました。現在、駐日韓国大使をつとめております崔相竜先生は、大使に任命されるまでこの研究所の所長を長きにわたってつとめられ、特に日本政治の問題に関しては、研究所内で特別なプロジェクトチームを組織するなど、非常に意欲的な日本政治研究をなさってこられました。

先行走者のそのような目覚ましい業績を前に、高麗大がこと改めて、また同じ学内にある亜細亜問題研究所などとは別途に日本学研究所を設立したのは、最近の韓国における日本学研究の環境変化とも微妙に関係していると思います。現在のそのような環境変化にいたる経緯を、以下に簡単にお話し差し上げたいと思います。

## 2. 日本研究者としての葛藤

これまでの韓国と日本の関係は、「一衣帯水」であるとか「近くて遠い国」などと表現されてきました。歴史的に両国は相互に密接な関係を保ちながら、経済・文化的にはもちろん、政治的命運にまで非常に大きな影響を及ぼしてきたことが、これらの言葉で表現されているのだと思います。ですが、現在につながる意味で申し上げれば、近代以降、特に1910年から36年間つづいた日本による韓国の植

民地支配は、両国関係、特に韓国における対日感情に非常に大きな影を落としたと言えます。このことはすなわち、韓国における日本研究にも甚大な影響を及ぼしているということにもなります。広い意味で申し上げれば、これまでの韓国において日本研究を行なっている個々の研究者の内的な動機には、内容や性格、また程度の差こそあれ、この36年間の日本による植民地支配が残したものが陰に陽に作用していると言っても過言ではありません。これは単に、韓国における日本研究自体が他の地域研究に比べて困難であるという問題以上に、その困難自体をも研究の対象にしなければならないほど、つまり研究者の主体や自我のあり方が絶えず問われるほど、少なくとも韓国の日本研究者を取り巻く環境には現在においても厳しいものがある、より正確に言えば、自己に対する厳しさが要求されるということになると思います。

もちろん、このような厳しさはもしかしたら、大学において研究活動に携わるものに普遍的に要求されるものと同じ類いのものなのかもしれません。一時的な感情に流されることなく研究対象をとらえ、またそれを深く掘り下げ、その客観化を期すことが研究者の使命だと言えるからです。ですが、たとえば私が専攻としております日本近現代文学の研究の場合などを考えましても、そのような使命を韓国において貫徹することは、なかなかの困難を伴わざるを得ないということが言えると思います。例えば、私は以前、村上春樹や丸山健二らの小説作品を韓国に翻訳・紹介するという仕事をしたことがあります。これらの翻訳は、特に1990年代の韓国の若い読者に非常に高い評価を受け、同時代の韓国の作家も日本のほぼ同時代の小説を評価するということもあり、紹介者の私としても大変な名誉に浴することとなりました。ですが、一方では韓国における小説趣向の<日本化>を警戒するムードも醸成され、また最近では韓国の一部の作家に日本の小説の剽窃に近いような作品（これは村上や丸山の作品に対するものではありませんが）が指摘されるにつけ、日本文学を研究・紹介する私としても非常に複雑な心情を抱かざるを得

ませんでした。このような現象は、少なくとも韓国におきましては単純な「影響」や「盗作」では済まされない問題なのです。日本で生産されるものに対する韓国側の過剰親和という問題は、なにも小説作品に限らず、現在でも韓国社会の各分野で見られることですが、それに対する警戒の声の方もそれに負けず韓国国内で絶えず止むことがありません。私がそのなかにあって複雑な気持ちになるというのは、この両者、つまり日本のものに過剰親和しようとする主体と、その同化を警戒する主体の両方が、自分の中に同居、あるいは雑居しているからなのです。

つまり、日本のいい小説に接すれば、私は創作の能力はありませんが、少なくともそれを韓国語に翻訳することで、第二の創作を楽しむたいという欲求は、私も含めて翻訳者の誰にでもあると思います。日本語と韓国語は語順が似ていて、翻訳者としての苦労は他の外国語に比べて相対的に少ないとも言えますが、それでも日本語の多様な比喩表現や、また異なる文化を背景にした事象などを韓国の読者に理解させ、全体の主題を韓国人も自らの問題として共有できるように還元することは、翻訳者としての腕の見せどころでもあり、また何よりも日本研究に携わる者の使命であるとも思います。ですが、結果としてその翻訳（輸入）が、自国の作家の創作（製造）に芳しくない影響を与えようとするならば、ある意味で「輸入制限」をしようという声が上がっても不思議ではないと思うのです。

また、その「輸入先」が他でもない日本であるとすれば、かつてその日本に自主的な近代化の道を阻まれ、今、現在もその後遺症に悩む韓国社会としては、やはりその流入に対して非常に敏感に反応せざるを得ないでしょう。この「後遺症」とはコンプレックスと表裏一体のものです。話をごく簡略化してしまうならば、「私たち韓国人は近代以降、自らの手で成就・完遂させたプロジェクトが、いいものであれ悪いものであれ、何一つないではないか」という、近代以降における達成感の欠如、植民地支配を受けた者としての欠乏意識と非常に深く関係しています。これはあくまで「達成感の欠

如」という主観的な問題であって、実際に歴史的・客観的にどうであったかとは別の問題だと私は思うのですが、言葉を換えて言えば、これは事大意識を克服しようというきわめて近代的な主体確立の主張の延長線上にあるものと言ってもいいでしょう。ですから、日本のものが韓国に入ってくることを憂慮する声が、たとえ偏狭な民族主義者のそれであっても、同じ韓国人として私はそれに同意せざるを得ない積極的な側面を持っているのです。

私のこのような葛藤や姿勢が、韓国国内において政治的・倫理的にどのように判断されるかは、ここでは詳細を述べることを避けたいと思いますが、少なくとも韓国における日本研究者は大なり小なり似たような葛藤を経験していると思います。もう一度、比喩的に申し上げれば、日本から流入するものを制限しようという、いわゆる保護貿易主義的な主張に対して、競争力や免疫をつけてこそ自国の企業が成長するという自由貿易主義的な主張は、一見、もったもののように聞こえますし、現在、金大中政権が国内経済や貿易のみならず、対北朝鮮や対日外交なども含めた各分野で行なっている政策は、まったくその方針のもとで進行しています。ですが、そのことが韓国社会にもたらす影響を一顧だにすることなく、そのような主張や政策を無条件に実行していくことはまず不可能でしょう。ましてや日本研究もその中に含まれるはずの学問の世界は、個人や集団の経済的利益や便宜をはかる功利的な面を越えて、人間の精神的な部分を扱うことを活動の骨子としているのですから、そのような文化摩擦的な面も充分に考慮しなければ、学問に足るものとは到底言えないだろうと思います。

問題はそれをいかにして実行に移していくかということですが、それは今のところ、そして将来にわたってもおそらく、研究者各人のディシプリンに任されるだろうとしか言えません。これは大変無責任な主張のように聞こえるかもしれませんが、ただ、このような葛藤に対する心の準備をしているのとしていないのとは、つまり、そのような問題の存在を自覚しているのとしていないのとは、個々人

の行なう研究の質もかなり異なると思うのです。これを学問研究に関して言うならば、韓国における日本研究は、単なる相手国に対する研究、あるいは過ぎ去った歴史に対する純粋学問的な研究や、または普通の外国に対する純粋知識の探求の次元を越えた、実践的な意義を持つべきものなのだと思います。この「実践的な意義」というのは、様々な問題や矛盾を正確に理解・把握し、人間の文化やその可能性を考えていくという、自己発見的な性格をもつべきだということですが、そのような研究の必要性や重要性は、少なくとも韓国の日本研究に関して言う限り、いくら強調してもしすぎることはないと言えるでしょう。

日本研究も含めて一般的にそう通称される地域研究は、19世紀以後の帝国主義の要求、植民地化や植民地経営の円滑な遂行という現実的必要性によって始められ、以後、独立的な学問体系を確立していくようになりました。しかし、それとは逆に被植民地国家が先進国を研究対象にする場合、具体的には韓国が旧植民地宗主国であった日本を研究することを考えた場合、研究者個人は私が今述べたように複雑な様相に身を呈することになることは必至であると思います。研究の主題選定には研究者の主観が排除され得ないとしても、事実と価値評価を混同しない学問的な禁欲主義に立脚した客観的な学問でなければならないということは、こと韓国における日本研究でも例外ではありません。しかし、そのことは、研究者を取り巻く環境上の困難を顧みることを除外するものではないでしょう。研究者として単純に韓国の国民を代表するかのような錯覚、国民主義に対する安易な接着に距離を置きながらも、そのような文化摩擦のありかを明らかにすることもまた、韓国における日本研究の学問的な客観性をより保障していく重要な作業だと思います。

### 3. 日本学研究の環境変化について

何か結論めいたことを先に申し上げてしまった感がありますが、

以上のようなことを念頭に入れた上でないと、きわめて一般的で平凡な経緯と展望を述べるにとどまってしまうと思いましたので、あえて一研究者としての展望を先に述べさせて頂きました。

以上のような日本研究者としての私個人の見解を支えているのは、他でもなく韓国における日本研究がこれまでに歩んできた経緯と深く関係があります。韓国における日本研究は、先にも述べましたように日本と韓国との間の歴史的関係、政治的状況、学界の環境などから多くの制約を受けてきました。1945年以前にまで遡りましても、日本による植民地支配の状況下で、韓国人によって日本に関する本格的な研究が行われることは大変難しく、1945年の解放直後に存在したごく少数の日本学専攻者の活動もまったく陽の当たらぬところでの微視的な研究にとどまっていました。また、李承晩政権の反日排斥の影響のもとに植民地支配の経験の影が根強く残っている時期で、日本を研究対象として専攻する研究者が新たに輩出される環境はどこにもありませんでした。そのような環境は1960年代まで続き、その間の日本研究における学問的蓄積は全くないに等しい状態でしたが、日本と韓国の国交が正常化した1965年を起点に、韓国における日本研究は新たな転換期を迎えたと言えるでしょう。そして70年代に入ってようやく専門的な関心をもった日本研究者が見るべき研究成果を発表しはじめたのです。このような流れは韓国における日本研究に関する限り、人文・社会科学に共通して見られる傾向だと思えます。

ただ、それまで日本における学問上の研究成果がまったく韓国に入って来ていなかったかというのではなく、この約20年間のブランクは日本語を解する研究者が旺盛に活動していた時期でもありましたので、各学問分野における日本人の研究成果は、ほとんど同時期に同じ分野の韓国人研究者によって読まれていたということも強調しておいた方がいいかもしれません。また同様に、大学に独立した日本学関連学科が設置されていなかったとはいえ、語学、文学、歴史、政治、経済などを専攻する大学の学科や学会などで、研究者



が必要に応じて日本に対する検討や分析を行っていたことも、付け加える必要があるでしょう。

70年代に入ってからの日本研究者の増加は、各大学における日本関連学科や研究所の設置、また各学問分野での日本関連学会の結成という具体的な現象の結果であると思います。大学の学科設置に関しましては、日本語学科や日語日文学科などの名称に見られるように、日本語学や日本文学の教育と研究を中心に行なうような構成をとっていたため、研究者人口でいえば、この日本語学や日本文学の分野の研究者が急増するという結果となり、その他の歴史や政治、経済などの学問分野に関しては各専攻学科、例えば日本史に関しては東洋史学科などの中に日本史専攻者のポストが置かれるようになりました。正確な統計は分かりませんが、おそらく日本学研究者の半数以上は語学・文学の専攻者で、この割合は現在まで維持されていると言えるでしょう。政治学、経済学などの社会科学に関しては、70年代にはアメリカで日本研究を専攻して学位を取得した研究者が大学でポストを得るということもありましたが、他の分野も含めて80年代以降は、ほとんど日本や韓国での学位取得者が大勢を占めています。80年代には、高麗大学校にも日語日文学科が設置されましたが、この時期の韓国における日本研究は質的な向上、量的な拡大の傾向がいちじるしく、1989年1月の韓国人の海外旅行の完全自由化に伴って、私費で日本に渡り、日本での長期滞在を通じて博士学位を取得するという留学スタイルも増加・定着して現在に至っています。

また90年代に入ってから、大学などでも国際大学院という特殊大学院で日本研究プログラムを設置したり、公共機関や民間企業でも日本研究部門を置くことが多くなりました。さきほど高麗大に亜細亜問題研究所があったり、日語日文学科が設置されたりしたことを申し上げましたが、ソウル大や延世大などの名門大にも、学部レベルでの日本学関連学科はないものの、各専攻分野で優秀な日本学研究者を輩出しています。また、ソウル大では最近、学部レベルで



日本学科を設立しようという動きが出ていますが、すでに大学院レベルでは、国際地域院という大学院と研究所を兼ね合わせたような機関で日本学関連コースが設置されています。大学院の方では自らの研究に合わせてソウル大の各学部の教員を比較的自由に指導教授として選択することができ、非常に質の高い教育と研究が行なわれています。またこの国際地域院の中に日本資料センターというパートがあって、ソウル大内の日本研究を支援するために、資料の収集・分類、研究者への支援にとどまらず、長期的に韓国国内外の日本研究の成果をデータベース化し、研究者が韓国国内外の各種文献や論文のテーマ、抄録などをホームページ ([http://sias.snu.ac.kr/japan/japanese/jap\\_index.html](http://sias.snu.ac.kr/japan/japanese/jap_index.html)) を通じて検索できるようにする計画などもあるようです。

このような環境の変化を受けて、大学に従来設置されていた既存の日語日文学科の方でも、日本文化学科などと学科名を改称し、語学・文学以外の専攻分野の教育・研究の拡充につとめています。同時に、大学院に日本学研究専攻の博士課程を置くことで、長期間に亘る日本への留学（学位取得）を選ばなくても、韓国国内の教育機関で基礎的な教育を受け、短期の日本への留学を通じて資料を収集する方式に移行できるように、研究者の配置や資料データベースの構築を行なっていくとする動きも最近になって目立っています。この背景には金泳三政権期以降、大学の外国学研究分野に語文学以外の地域研究分野を設置することを奨励する大学政策がありまして、各大学ともにその政策のもと、大学予算の範囲内で制度改革を行なっているというわけです。冒頭に申し上げました高麗大の日本学研究所の設置は、最近のこのような環境変化を受けて、これまで学問分野別に活動を行なってきた高麗大の日本学関連の教員の相互交流をはかり、その成果を学内外で共有すべく設立されたものです。また従来の学問分野では研究対象とされることのなかった文化研究に対してもスポットをあて、国際シンポジウムや共同研究などを通じて研究方法上の深化をはかるべく日夜努力を続けています。2000年

9月に開催されました第1回国際シンポジウムでは、ここ日文研の鈴木貞美先生もご出席下さり、非常に盛況のうちに幕を降ろしましたが、シンポジウム終了後の反響の方も私たちの予想を上回るものでした。その主たるものは、韓国人発表者も含めた先生方のそれぞれの発表が、現在の日本をみつめるうえで非常に客観性を備えており、海外における地域研究の模範を示したというものでした。また、日本国内ではなかなかできないような忌憚のない意見提示も、海外の日本研究だからこそ可能であり、このような研究が十分に蓄積されていけば、ある部分では日本国内での日本研究を凌駕するものを生み出せるかもしれないという展望を持ったものでした。このような賛辞に甘えることなく、私も所長として微力ながら自分のできる範囲内で活動範囲を拡げていきたいと考えておりますが、何よりも警戒すべきなのは、研究環境の量的な拡充がもたらす内容やレベルの低下です。そのような事態を防ぐためにも、ただ単に研究者や参加者の人員を増やすことにとどまるのではなく、外部からの研究支援なども積極的に受けながら、研究の質的向上にもつとめていきたいと考えております。

#### 4. 小 結

以上、非常におおざっぱではありましたが、1945年以降における韓国の日本研究の制度的経緯を見てきました。話が制度的な変遷に片寄った感があり、一見、韓国における日本学関連の研究環境が非常に拡充してきているように思えますが、このような研究環境の変化のなかでも、韓国の日本学研究者は先に述べたように韓国人としての複雑な内的動機や葛藤を抱きつつ、日夜奮闘していることは言うまでもありません。各学問分野の経緯や現状、展望などは、このシンポジウムで他の先生方が発表されると聞いておりますので、そちらの方を参照して頂ければと思いますが、できましたら私が先ほど申し上げたような研究者個人としての葛藤の具体的な様相の方

も、ぜひともお伺いできればと思います。

これまでお話し致しましたように、韓国における日本研究は近年にいたり、その量的・質的側面において急速な成長を成し遂げつつあります。特に最近の研究者には日本専攻に対する確実なアイデンティティーも形成され、多くの研究者が現地・日本で研究実績を持っており、より具体的で深度のある研究を日夜追究していると言えます。ですが、一方で韓国国内では、日本に対して隣国としての相互協力の必要性を感じている反面、植民地時代の経験などのために日本を警戒の対象と捉える世論も非常に強いものがあります。そのような世論に対して日本研究の必要性を訴えるためにも、研究者は自らの研究対象に対する正確で多角的な認識を持つことが重要でしょう。より具体的に言えば、何をどのように研究・教育すべきであるかを同僚の研究者や学生らと苦悩し対話することによってのみ、単純な海外における日本研究という枠やレベルを越えて、研究上の独自の争点を提示し、論旨を発展させていくことが可能なのだと思います。日本に留学し帰国した研究者の場合、ややもすると日本の研究成果や方法論を無批判に受容しているのではないかと思われる点が多々ありますが、そのような事態を防ぐためにも、研究者の間で不断に議論できるような共同研究を行なえる環境を整備していく必要があるでしょう。また同一のテーマに関心を持つ韓国国内の他の研究者、たとえば文学の場合、必要ならば他の外国文学の研究者らとの協力や交流をはかっていくようなことも、今まで以上に積極的に考慮すべきだと思います。そのためにもここ国際日本文化研究センターのような研究機関が、研究者のネットワークの中心となり、国籍を越えた学問の真の交流のための場となれば何よりかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕

- ・中央大学校地域研究所編（1988）『韓国内の日本研究者に関する調査報告書』
- ・日本国際交流基金編（1989）『韓国における日本研究』（国際交流基金、日本語）
- ・ソウル大学校地域総合研究所編（1990）『わが国の地域研究の現況・問題点・活性化方案の研究』のうち、吉スンフム「日本政治の研究動向」金容徳「日本史研究の現況と課題」など
- ・韓サンイルほか（1993）「特集：韓国の日本研究はどこまできたのか」『日本学報』第30輯
- ・韓国外国語大学校地域学研究会編（1994）『地域学の現況と課題』
- ・崔相竜ほか（1994）『日本・日本学』（図書出版オルム）
- ・高麗大学校亜細亜問題研究所編（1997）『韓国の日本研究便覧』
- ・李サンソプ・権テファン編（1998）『韓国の地域研究』（ソウル大出版部）のうち、金長権「日本地域研究の現況と課題—1990年代を中心に—」など